

# 昭和戦時下における慰問団の 実態についての一考察

葛西真由香  
(玉井研究会 4年)

はじめに

## I 慰問団の類別とその実際

- 1 慰問団の類別
- 2 慰問団における“女性”の存在
- 3 統制された現場
- 4 危険が伴う慰問行

## II 慰問の実態

- 1 慰問文
- 2 慰問袋

## III 慰問団に関する批判

- 1 慰問団自体への批判
- 2 慰問団の提供する演芸、娯楽への不満

## IV 慰問を騙る犯罪の横行

おわりに

はじめに

過酷な戦地や内地の労働現場で命をかけて働く勇士たちの心を支えていた慰問団（慰問隊とも呼ばれる）は、昭和15年まで陸海軍恤兵部<sup>1)</sup>と各地方の警察署長の証明書があれば誰でも組織して現地へ赴くことができた<sup>2)</sup>。この規定も次第に形骸化し、警察署からの認定さえあれば誰でも渡航できるようになっていったことで、様々な慰問団が組織され、陸続と戦地に送られた。そのため慰問団の質の低

下が問題となり、後述するような慰問団への不満も発生するようになったことから、昭和15年以降は恤兵部の証明が必要条件となる。

慰問団は出発する前に決まって宮城を遙拝し、明治神宮や靖国神社へ参拝して出発の奉告と武運長久を祈願し、陸軍省・海軍省の訪問を行った。列車で旅立つ際の駅の様子は、まるで戦地に向く出征兵士を見送るかのようになり盛大なものであった。たとえば満州事変後、少年団が兵士慰問のために満州へ旅立つ際の様子は「二千余名の外在郷軍人会有志、少年東郷会、その他諸団体代表が夫々国旗をかざしてつめかけ繰返し爆発する万歳の度に無数の国旗や提灯が揺れ動き未曾有の壮観を呈した……午後七時三十分発車のベルと同時に少年団のラツパが嘯とひびき渡り耳も聳するばかりの万歳の中に送」る<sup>3)</sup>という華美さであったと報じられていた。このように慰問団は出発時盛大に見送られ、帰京時には「手に日の丸の小旗や『駅歓迎』と書いた旗まで用意してまるで凱旋兵の歓迎みたいに『万歳』の嵐」が起きたという<sup>4)</sup>。

本論文では、満州事変の起こった昭和6年9月18日から終戦の昭和20年8月15日までの戦時を射程に置き、新聞や雑誌を参照して分析を行う。慰問団の実際とそれが同時代の中でどのように受け入れられていたか、また戦局が悪化していく戦時下においてその報じられ方や社会からの捉えられ方にどのような変化が生じていったのかを明らかにすることが目的である。

第I章では慰問団をその性格から類別すると共に、慰問の過程で彼らが直面した現状を確認する。第II章では当時の慰問の実態を主に慰問文と慰問袋に焦点を当てて分析する。第III章では慰問団が必ずしも歓迎されず、様々な批判を受けていたことを明らかにする。第IV章では慰問を利用した犯罪行為の実際を確認する。

## I 慰問団の類別と実際

本章ではどのような慰問団が存在し、彼らが直面した慰問の現実について明らかにする。

### 1 慰問団の類別

戦中、様々な団体が多種多様な慰問隊を組織、派遣していた。新聞や雑誌から読み取れる範囲では、これらは主に「国外派遣型／国内派遣型」、「視察メイン型

図1 慰問団の分類



(寄付金、家事手伝いも含める) / 演芸型 (歌、踊り、劇、漫才、囲碁将棋など)」という基準で区分することができた。本節では慰問団を大きく4つに区分し、メディアに大きく取り上げられていたものからあまり取り上げられていない特異なものまでを図1に示すように類別し、その概要を解説する。

#### (1) 国外派遣型かつ視察メイン型の慰問団

まず図1の①について説明したい。ここに類別される慰問団は北中南支や満州など国外に派遣され、かつ視察を主な目的に結成されたものである。その事例を下記に示したい。

まずは在満部隊慰問団として活躍した「郷軍慰問団」である。彼らは主に「留守宅の情況郷党の動静などを詳細に区出身者に伝達」することを目的とした慰問団<sup>5)</sup>であり、彼らによって戦地の兵士たちが故郷の様子を知ることができ、「感激され」たという<sup>6)</sup>。後述するが、戦地の兵士たちは内地、特に自身の故郷や生家の状況などの情報に飢えており、内地から送られる慰問文に対して、定型文より故郷で起こった何気ない出来事などを書いてほしいという要望が挙がっていた。文章ではなく人から直接話を聞くことができる郷軍慰問団の存在は、戦地の兵士たちに非常に重宝されていたといえる。

第二に、地元の有権者や衆議院や貴族院の議員などによって形成された「代議士満州慰問団」や「衆議院・貴族院皇軍慰問団」である。彼らは「北支、海軍艦隊+新京、ソ満国境方面」「北支、中支、南支」といった班に分かれ、衆議院や貴族院から調査期間中に数多くの慰問団が派遣されていた。議会においてそれぞれ交渉会を開き慰問する期間と人選を決定していた。人選は、衆院貴院に占める

図2 皇軍慰問から帰った愛国婦人会会員たち



「愛婦の一行帰る 皇軍慰問の旅路から」(『東朝』昭和12年4月28日夕刊3面)

政党の割合を考慮しているのか、政友会、民政党、社会大衆党などにそれぞれ人数が割り当てられている<sup>7)</sup>。これらの慰問団の活動は現地視察を主としており、戦地で得た情報などを議会に持ち帰り国政に反映させることが目的とされていた。また同時に戦地の兵士たちを叱咤激励し、戦意を鼓舞していた。もっともこの慰問団は後述するように、その立場や態度の大きさによって戦地の兵士から歓迎されない場合もあったようである<sup>8)</sup>。

第三に、東京市会の決定によって結成された「市会慰問団」である。満ソ国境、北支、上海における皇軍慰問を担い、既述の慰問団と同様に現地視察と兵士たちへの激励慰問を目的としていた。しかし、この慰問団は周囲から「大名行列」「大名旅行」と評されるほど華美であったため、世論から「轟々たる非難」が起こり、当初市会で決定していた派遣時期が半年も延びる事態となってしまうこともあった<sup>9)</sup>。これに関しては詳しくは第三章で後述する。

第四に、愛国婦人会の女性会員により結成された慰問団である(図2)。彼女らは、主に支那地域の軍隊や、当時「白衣の勇士」と呼ばれていた傷病兵が治療を受けていた現地の野戦病院の慰問などを行った<sup>10)</sup>。女性と縁遠い過酷な戦地において、女性の慰問団が来ることはかなり珍しかったため、兵士たちは彼女らを一様に歓迎したようである。女性慰問団への待遇については次節で詳しく述べる。

第五に、子供による少年、少女慰問団である。彼らは傷病兵のいる野戦病院や領事館、現地の小学校などを慰問し、その無邪気な様子から戦地の兵士たちに大変喜ばれていた。新聞紙上では、「可愛い慰問」使<sup>11)</sup>や「豆慰問隊」<sup>12)</sup>という表現が多く見られた。また女子・青年団や女学校、大学の学生らで結成された学生

慰問団も多く現地に派遣されていた。全日本連合女子青年団は、大連、吉林、ハルビン、奉天等を自費で慰問し、軍の労をねぎらった<sup>13)</sup>。日の出高女や目黒高女の女学生たちは、満州傷病兵の慰問や現地の女学校を訪問する活動を行っている<sup>14)</sup>。慶應義塾大学や明治大学の自動車部は、夏休みなどの長期休暇を利用し、大量の慰問文を戦地に届けたり内地の留守家族に兵士たちの写真を送ったりするなど、内地と戦地を結ぶことに尽力すると共に、兵士らの輸送や軍用荷物の輸送にも協力していた<sup>15)</sup>。

最後に、特異な慰問団として元共産党闘士（転向者）らによって結成された慰問団がある。彼らは「司法省保護事業<sup>16)</sup> 連盟皇軍慰問団の代表として北支皇軍を慰問<sup>17)</sup>」した。思想犯として保護観察を受けていた元共産党の闘士たちを戦地に派遣し、日本国のため命をかけて戦っている兵士たちの様子や過酷な戦地の現実を肌で実感させることにより、再び共産主義に回帰しないようにする司法省の政策の一環であった。彼らは日本に帰国後、「奮闘する皇軍の前には唯頭が下りました、私達が各所で皇軍を慰問したといふより私達が皇軍に慰問されたと云つていゝ程でした」と皇軍への信頼と感動を報告している。このように、慰問団は戦地の兵士らを鼓舞する働きの外に政治的意図で派遣される場合もあったのである。

## (2) 国外派遣型かつ演芸型の慰問団

図1の②の、国外に派遣され、かつ様々な演芸や娯楽を戦地に届けることを目的とした慰問団について以下に紹介する。

まずは漫才や講談など、直接戦地に「笑い」を届ける演芸慰問団である。その中でも有名なのは、朝日新聞社が吉本興業に依頼する形で実現し派遣された新聞社主催慰問団「わらわし隊」である（図3）。「わらわし隊」は、当時の陸軍海軍の戦闘機部隊の愛称であった「荒鷲隊」の名称をもじってつけられたネーミングであり、当時吉本興業文芸部に所属していた長沖一が命名者とされている<sup>18)</sup>。初回派遣時のコンセプトは「初笑いを届ける」で、大陸に5回派遣され、内地でも数多くの凱旋公演を行っていた。「焼夷弾を見舞う」とかけて、「笑慰弾を見舞う」という言葉が紙面に何度も登場した<sup>19)</sup>。わらわし隊は当時の有名人気芸人たちが集められたため、その話題性の高さからか、主催者である朝日新聞だけでなく、ライバル社である読売新聞でも記事や広告が沢山見られるのは興味深いところである。中でも事前の予想を超えて盛況であった第1回わらわし隊のメンバーは、

図3 わらわし隊凱旋公演の広告



〔広告〕 わらわし隊／有楽座 ほか〔読売〕昭和13年3月23日第2夕刊3面)

北支那慰問班と中支那慰問班の2つに分けられ、前者には有名落語家であり部隊長役の柳家金語楼、漫才コンビの花菱アチャコ・千歳家今男、漫談家の柳家三亀松、浪曲師の京山若丸（曲師・中川八重子）、喜劇作家兼俳優の仲沢清太郎が任命された。後者は、小唄の石田一松、漫才コンビの横山エンタツ・杉浦エノスケ、夫婦漫才の玉松一郎・ミスワカナ、講談師の神田ろ山、吉本創業者の実弟で戦後吉本興業の名物社長となる林正之助（監督役）という豪華なメンバーで構成されていた。戦地でも彼らは大いに歓迎され、舞台前までぎっしりと兵士たちで埋まっている様子（図4）や、部屋が満員で入れず、窓によじ登って外から鑑賞する兵士たちの様子（図5）などが写真に記録されているほど大盛況であった。過酷な戦地において兵士たちがいかに笑いに飢えていたか、またわらわし隊の演芸慰問が兵士たちにどれほど喜ばれていたかは筆舌に尽くしがたい。

第二に、宝塚や松竹の少女歌劇団のスターらによって構成された慰問団である。彼女らは歌と踊りの慰問を行うと共に、煙草やチョコレート、キャラメルなどの嗜好品を慰問品として戦地の兵士たちに届けた<sup>20)</sup>。また宝塚や松竹主催慰問の他に大衆シアターなどで活躍していたアイドル女優らも慰問行に出ており、戦地の兵士たちを癒していた。ムーラン・ルージュの舞台女優であった明日待子は、戦地で兵士たちからひっそりと手紙の束を渡され、帰国したら郵便ポストに入れてほしいと頼まれたと語っている<sup>21)</sup>。兵士たちが内地に向けて書く手紙は、まず彼らの上官の手に渡り、軍部によって厳しい検閲がなされた。彼女らの協力を得られれば率直な思いを内地で待つ家族に知らせることができるといえる点も、兵士たちを喜ばせる要因だったのではないかと考えられる。

第三に、プロの囲碁棋士や将棋棋士らによって結成された慰問団である。彼らは囲碁盤や将棋盤を戦地に持ち込み、戦地の兵士らや野戦病院の傷病兵らを慰問して彼らと囲碁や将棋の対戦型慰問を行った。詰将棋集などの書籍も持ち込み<sup>22)</sup>、その場でルールを覚えて楽しむ兵士もいたという。彼らの慰問は沢山の兵士に喜ばれたというが、その一方で囲碁や将棋を知らない、興味のない兵士らにとってはあまり受け入れられなかったらしい。詳しくは後述する。

第四に、日本書家や漫画家などによって結成された美術、演芸慰問団である。彼らは戦地の兵士や傷病兵を慰問して彼らの似顔絵を描くなどの活動を行った(図6)。舞踊家や音楽家たちとタッグを組み、舞台上で公演をすることもあったという。特に女性文芸家らによる慰問部隊は別名「輝ク部隊」<sup>23)</sup>とも呼ばれ、戦地の兵士らにとっても好評だったようである。

最後に、数百名の選抜力士による相撲慰問団である。彼らは南支前線を慰問し、現地で慰問相撲を行った<sup>24)</sup>。土俵は現地の兵士たちが作ったようで、横綱玉錦は「勿体ないやら、有難いやら、とに角内地では見られぬ一生懸命の勝負をしました」と語っている<sup>25)</sup>。

このように、慰問団が公演で使う舞台の作成は兵士たちに任せられることがあ

図4 わらわし隊の公演に集まる兵士たち



「「笑鶯隊員」ろ山泣く 亡き弟子の隊で熱演」  
 (『東朝』昭和13年2月12日朝刊10面)

図5 わらわし隊の公演会場に入りきらず外から覗く兵士たち



早坂隆『戦時演芸慰問団「わらわし隊」の記録——  
 芸人たちが見た日中戦争』(中央公論新社、平成20年)

図6 似顔絵を描いてもらって喜ぶ兵士たち



「奇襲漫画慰問団」(『写真週報』昭和16年3月26日第161号18-19頁)

図7 生産現場で家事手伝いをする女性たち



「異郷に身に沁む母の愛 少年工感謝集 増産でご報恩 勤労奉仕日婦会員へ感想文」(『読売』昭和17年12月22日朝刊3面)

演芸型慰問団の要素も持っていたが、徴兵や軍事動員によって男手が足りない農村の託児所に出向き、日中働く母親たちの代わりに子供たちに紙芝居を読み聞かせたり一緒に遊ぶ活動も行っていた<sup>28)</sup>。

第二に、大日本婦人会や愛国婦人会の会員による女性慰問団である。彼女らは増産運動によって工場で働く産業戦士を訪問し、洗濯や繕物などの家事を手伝う活動を行った(図7)<sup>29)</sup>。「本当の母や姉のやうな真心こもる慰め」をもって家事

り、「舞台問題」が発生することもあったという。ある女子青年団の慰問団のための舞台は、軍の中で割り当てられた舞台係によって数時間で作られた。輸送トラック5千円と舞台装置1万円の計1万5千円をかけた素晴らしいものだったという<sup>26)</sup>。新聞や雑誌にはこれらに関する兵士たちの否定的意見を見ることができなかったが、自分たちのための慰問といえどもその舞台を過酷な状況下で戦っている兵士たち自身が作らねばならないことに不満を感じる者も少なからず存在したのではないかと推測される。

### (3) 国内派遣型かつ視察メイン型の慰問団

図1の③の、国内に派遣され、かつ視察や家事手伝いなどを目的とした慰問団について紹介する。

まずは、女学生らによる学生慰問団である。彼女らは傷病兵を慰問し、手作りの人形をプレゼントしたり、歌や踊りや漫才などの演芸家とタッグを組んで演芸披露を行う<sup>27)</sup> など

図8 声の慰問団の慰問に喜ぶ傷病兵たち



少女と称して涙と嬉しさうな十一勇士

「光なき11勇士」へ 可憐、声の慰問団 陸軍病院に麗しい風景  
 (『読売』昭和12年12月8日朝刊7面)

を手伝う彼女らの活動は「一日お母さん」運動とも呼ばれ<sup>30)</sup>、特に少年工らは「涙を流して感激し今後一層生産拡充への奮闘を誓」うほど喜んだという<sup>31)</sup>。また、愛国婦人会の会員たちは軍人遺家族の慰問も担っていた<sup>32)</sup>。

最後に、区や村の有力者、代表者による慰問団である。彼らは定期的に留守家族・遺家族の家を訪問し、その様子を視察したり少額の金銭支給をする場合もあった。これは自治会の中での相互扶助体制の一環だと見ることができる。

#### (4) 国内派遣型かつ演芸型の慰問団

図1の④の、国内全国に派遣され、かつ歌や踊りなどの演芸を主な活動内容とした慰問団を下記に示す。

まずは園児や小学生ら子供によって結成された慰問団がある。彼らは上記にも示したように新聞メディアに「可愛い慰問」団と表現されることが多く、国内の陸軍病院で療養している傷病兵を訪問し、歌や踊りなどの遊戯を披露したり、慰問文や手作りの花輪などを届けたりと<sup>33)</sup>、兵士たちを大いに喜ばせた。特に戦闘によって視力を失った兵士たちへの慰問団は「声の慰問隊」と呼ばれ、共に合唱をするなどして盲目の兵士たちははばし「闇の世界を忘れ」ることができたという(図8)<sup>34)</sup>。

第二に、炭坑や鉱山、工場労働者向けの演芸慰問団がある。アメリカの石油輸出禁止によって深刻な資源不足に陥っていた日本は、国内の炭坑や鉱山の資源確保に力を入れていた。そこで多くの労働者が登用され、昼夜問わず過酷な労働環

境の中で働く“鶴嘴戦士”が誕生した。また工場でも増産が叫ばれ、“生産戦士”らにも過酷な労働条件が課されていた。彼らを激励し、より生産効率を上げることを目的に、大日本産業報国会によって多くの演芸慰問団が組織されたのである。歌や踊り、漫才や映画上映など、その種類は多岐にわたっていた。

以上4つの区分には含まれなかったが、特異な慰問団としては国内派遣の鍼灸慰問隊<sup>35)</sup>や輸血慰問隊<sup>36)</sup>、国外派遣の歯科医慰問団<sup>37)</sup>など、兵士や労働者の健康に着目した慰問団も存在した。

上記の通り、慰問団派遣は国を代表する衆議院や貴族院の議会から東京市会など市区町村の議会、各地域の郷会などの地方組織、そして婦人会や青年団などの諸団体に至るまで、大小公私を問わず様々な組織により結成されていた。また「戦争に動員された様々な立場の人々を慰め、叱咤激励する」という共通目的の下、活動内容は各団体の裁量に任せられていたため多岐にわたり、各団体の個性が表れていた。派遣先も多様であるが、読売新聞と朝日新聞で報じられている慰問団の記事（慰問団結成や帰京などの内容）件数を調査した結果、新聞メディアにおいては国内慰問より国外慰問を多く取り上げる傾向が見られた。特に表1に示すように、日中戦争勃発の昭和12年から昭和14年にかけての3年間は、国外慰問報道のピークであった<sup>38)</sup>。これは対外戦争開戦に伴い戦地視察や慰問の重要性が高まったことで国外に派遣される慰問団の数自体が増えたことや、それらを新聞メディアが報道することで戦地の様子を内地に共有する意図があったと考えられる。しかし日中戦争が長期化し打開策として日本が南進を開始するなど戦局が悪化し始めた昭和15年からは両新聞の記事数が急激に減少し、日米開戦後、しかもインパール作戦の失敗など日本が敗戦する可能性が濃厚になった昭和19年以降は国外慰問報道が全く見られなくなった。戦局悪化に伴い国外に慰問団を派遣する余裕がなくなり慰問団の数が減少したことや、演芸などによって兵士を慰める「慰問」というトピックすら不謹慎と捉えられ始めた国内の風潮に新聞メディアが対応した結果であろう。その代わりに、昭和15年まではあまり報道されていなかった国内慰問が昭和16年から昭和19年にかけて増加していることが分かった。昭和16年にアメリカが日本への石油輸出禁止を執行したために資源確保が急務となり、国内で増産運動が起こったことで炭坑や工場で働く労働者を激励する必要から、国内慰問団の数が増えたと考えられる。

このように、慰問団の種類や数、メディアによる報道は日本の対外的状況に大きく影響を受けていたのである。

表1 派遣地別慰問団関連記事数（読売新聞、朝日新聞より）

|       | 国外派遣慰問団数 |      | 国内派遣慰問団数 |      |
|-------|----------|------|----------|------|
|       | 読売新聞     | 朝日新聞 | 読売新聞     | 朝日新聞 |
| 昭和6年  | 11       | 4    | 0        | 0    |
| 昭和7年  | 2        | 0    | 1        | 0    |
| 昭和8年  | 4        | 1    | 0        | 0    |
| 昭和9年  | 0        | 0    | 0        | 0    |
| 昭和10年 | 0        | 0    | 0        | 0    |
| 昭和11年 | 7        | 6    | 0        | 1    |
| 昭和12年 | 26       | 68   | 2        | 1    |
| 昭和13年 | 26       | 63   | 5        | 3    |
| 昭和14年 | 17       | 38   | 2        | 3    |
| 昭和15年 | 5        | 14   | 0        | 1    |
| 昭和16年 | 11       | 13   | 6        | 6    |
| 昭和17年 | 4        | 12   | 7        | 3    |
| 昭和18年 | 18       | 13   | 8        | 7    |
| 昭和19年 | 0        | 0    | 5        | 5    |
| 昭和20年 | 0        | 0    | 0        | 1    |

## 2 慰問団における“女性”の存在

女性がない戦地にとって、慰問団として内地から渡ってくる女性たちはとても喜ばれ、歓迎された。皇軍将士芸術慰問団第3班として慰問演奏をしていた女性流行歌歌手松原操（ミス・コロムビア）は、慰問のステージに立つ前に兵士から「差支へなかつたらユツクリ歩いて下さい。着物は珍らしいですからな」と言われたそうだ<sup>39)</sup>。出征以来女性を見ていない兵士が多い戦地では、着物姿が大変珍しかったのである。また北支戦線の慰問に訪れた女性たちは新聞紙上の座談会において「女であるといふだけで、いいんでせうね」「どこの誰だか訳のわからん、男の慰問使は嫌はれてゐる」<sup>40)</sup> という話や、「女が来たといふんで随分握手され」<sup>41)</sup> と語っている。この事情を理解していたわらわし隊のミス・ワカナは出発前に「女の方をあまり見ることの出来ない第一線ですからワカナの着物を持つて

行つて日本の踊りを見せたり、流行歌を唄つたり大いに国粹主義を味つていた、`かうと思ひます」と語っているくらいである<sup>42)</sup>。しかしその一方で、これら慰問団の女性たちを“性的対象”とした扱いをする兵士たちがいたことも事実である。放送協会南方慰問団としてシンガポールに赴いていた女性歌手の奥山彩子は、若い士官に「藤原千多歌というのは、ちょっとかわいい顔をしているが、あれは子どもで駄目だ。うん豊島珠江というのはなかなかおもしろそうだ。あれ今夜、俺の部屋へ泊りに寄越してくれないか」と言われ、悔しさに涙した。また総参謀長の副官から「いま車を出すから、慰問団の若い女だけ閣下のお部屋へ寄越せ。男は一人も来ないでよろしい」という電話を受け、慰問団では皆がいきり立ったという<sup>43)</sup>。このように、慰問団の女性は戦地の兵士たちに喜ばれ重宝された一方で、女性としての尊厳を傷つけられることもあったのである。

### 3 統制された現場

後述するが、日本が劣勢を強いられている時、工場や炭坑、鉱山では“増産強調運動”が叫ばれ、日夜“増産戦士”たちが身を挺して「汗みどろ、血みどろ」<sup>44)</sup>で職務に当たっていた。そこで彼らの激励慰問のため大政翼賛会や大日本産業報国会、軍需省、情報局などの諸団体が慰問団を多く派遣していた。しかし様々な演芸で彼らを慰め、激励するその意図に反して、慰問現場では工場幹部など統率者による従業員への過度な統制が行われていたことも浮き彫りになっている。次の引用文は、ある慰問団の漫才師が某飛行機工場に慰問に訪れた際のエピソードである。

さ、やかな“工場の寄席”には女工さんや女子挺身隊が「かぶりつき」にずらつと並びその後には男工につ、`いて工場の幹部が陣取つてゐた、漫才が始まつた、笑ふ、笑ふ、箸が轉んでもをかしい年頃の女工さんなら漫才師が一言喋る度毎にドツと笑ひくづれる、ところが後の席から工場長か誰か幹部の声が飛んだ「をかしくもないことをそんなに笑ふなッ！」途端に女工員たちは唇を閉ぢそれつきり、しまひまで笑わなくなつてしまつた<sup>45)</sup>

工場幹部の厳しい監視は楽しいはずの漫才鑑賞の間にも続いており、彼らの工場娯楽への理解の有無によって、従業員が自由に笑い娯楽に浸ることもできなかったのである。以上は国内慰問における例であったが、国外慰問においてもこ

のような状況は見られた。次の引用文は、日本人が引率する支那人サーカスが支那地域の避遠な小さな分屯隊に慰問に訪れた際のエピソードである。

見物人は、ものものしい監視のせゐもあつて、ひどく神妙だつた。……それでも後方の圧力におされて、丸太の劃線からはみ出し、そこにあふれた者は垣のアンペラをおしたふしたりした。すると、警査が銃を振り回し、仰山の威嚇だつた。けれども、かれらが静肅になると、しばしば、サーベルを吊り新調の制服に威厳を飾つた署長が、わざわざ天幕小屋の指定席からとびだし、観衆にむかつて手をふりまわし、大ごゑ張りあげて、盛大な拍手の督励だつた<sup>46)</sup>。

上記のような統制がなされていた現場では、慰問する側もされる側も大変居心地が悪かつたであろうことが推察される。慰問現場の理解によって慰問団の奮闘が無に帰す場合もあつたのである。

#### 4 危険が伴う慰問行

国外に派遣された慰問団は、戦闘中の最前線に赴くことも多く、その分大きな危険も伴っていた。

読売新聞社が上海で組織した前線慰問隊は敵と交戦している日本軍の塹壕にまで迫つた。その際、原特派員は「楊行鎮〇里の先に陣を張り劉家巷の無電塔を目の前に泥まみれで敵を攻撃してゐる敵前上陸戦の花形鷹森部隊の最前線」において「物凄い敵の弾雨」で「塹壕の前の草をシユツシユツととんでゐる」状況を経験している<sup>47)</sup>。中支を慰問していた女浪曲師が、敵弾に当たり負傷したという事件も起こっている<sup>48)</sup>。慰問団が大陸移動に使つた列車も大変危険で、「匪賊が襲撃するので絶対窓を開け」ることができなかつたという<sup>49)</sup>。

また、次のように実際に慰問団自体が襲撃され、命を落とした者もいた。

わが慰問団10名を乗せて済源を出発した自動車〇輛が苗床附近にさしかゝるや、突如軽機三を有する敗残匪約二百名が襲撃、寡兵と見た敵は手榴弾をもつて猛烈に襲ひかゝつたが、わが方は僅〇〇名をもつて応戦、激闘数時間ののち敵に多大の損害を与へて東南方に撃退した、……慰問団女子1名も重症を負うた<sup>50)</sup>

この「慰問団女子1名」とは、わらわし隊の団長である桂金吾を夫に持ち共に夫婦漫才をしていた花園愛子である。彼女は負傷した運転手を助け出そうとした際に「右大腿部に二発の銃弾を受けて歩行不能」に陥り、出血多量で亡くなったという<sup>51)</sup>。

また疫病も脅威であったようで、慰問団としての派遣ではなかったが、インパール、インド侵攻作戦の特別派遣報道員としてビルマにて「ビルマ派遣軍の歌」の作曲に取り組んでいた作曲家の古閑裕而は、現地でデング熱にかかり生死の境をさまよったという<sup>52)</sup>。ビルマやフィリピン、亜熱帯諸島には放送協会南方慰問団など数多くの慰問団が渡っていたため、これら疫病への恐怖は全慰問団に共通するところであった。慰問団員たちは命がけの慰問を行っていたのである。

## II 慰問の実態

本章では、慰問を受けた戦地の兵士たちにとって何が喜ばれたのか、その実態を明らかにする。

内地から送られた慰問文や慰問袋は、前線と銃後を結ぶ大切なものであり、これらは郵送の他、慰問団のような内地と戦地を行き来する人々に託されていた例も多かった。わらわし隊の杉浦エノスケは、わらわし隊上海行の前のインタビューで「どう考へても私は郵便やさんですね。私が上海に行くといふので知人連から手紙やお守りを山のやうに頼まれました。リュツクサツクは他人の手紙で一杯、おかげで自分のものはシャツ一枚持てない始末です」<sup>53)</sup>と語っている。戦地の兵士たちもこれら内地からの慰問文や慰問袋を大変心待ちにしていたようであるが、戦地の兵士たちが実際に受け取って喜んでいたのはどのようなものであったのか。

### 1 慰問文

戦地の兵士たちにとって、慰問文は自分の故郷を知る大切なツールであった。したがって、「どこの家の猫が仔を3正生んだとかどこの川には鮎が多いとか言ふ様な親しみこめた身近かの便り」<sup>54)</sup>のように「家庭的な」<sup>55)</sup>内容が最も喜ばれた。その反対に定型文が載っており、大量生産されていた「印刷慰問状」<sup>56)</sup>は喜ばれなかった。橋本欣五郎大佐は、「印刷した慰問文位癩にさはるものはない、わしはわし一人が憎まれ者になるつもりでその発送者に一々送り返すと共にどう

かわしの部下にだけは心のこもつた手紙を寄越してくれと書いてやる」と怒りをあらわにしたほどであった<sup>57)</sup>。また、様々な慰問文が紹介されている『昭和模範慰問文』<sup>58)</sup>や女子向けの『兵隊さんに送る女子慰問文』、慰問文の書き方が丁寧に記載されている『最新大東亜戦慰問文』や『最新戦時女子慰問文』という書籍も出版されており<sup>59)</sup>、『昭和模範慰問文』は第9版まで発行されていることから、多くの人々に読まれ、慰問文を書く際の参考にされていたことがうかがえる。

## 2 慰問袋

慰問袋とは、主に日用品や食料品を入れた戦地の兵士たちを慰めるものである。その起こりは明治時代の日露大戦時ともいわれ、それを愛国婦人会が復興させたという<sup>60)</sup>。慰問袋は当初その多くが貧困層も含まれる無産階級から贈られており、反対に金銭的余裕のある金権階級は「慰問品は愚かビター文の慰問金さへ贈る者が無い有様」だった。読売新聞では、金権階級である石黒子爵が慰問袋を贈った際にこの出来事を「正に金権階級への冷水だ」と皮肉めいた言葉で報じていた<sup>61)</sup>のは興味深い。

自身は慰問状と同様、「人情と真実のこもつたもの」<sup>62)</sup>が喜ばれたようである。陸軍省恤兵部は「慰問袋の注意」という文書を示しており、この中で慰問袋に入れるべき6つのものを挙げている<sup>63)</sup>。

- ①誠意の籠つたもの
- ②心よりの慰安、娯楽になるようなもの
- ③子供の手工作品其他
- ④余り気付かれぬ日用品（耳搔、爪切、安全カミソリの刃など）
- ⑤行軍中等にも使用できる食料品、調味料等
- ⑥読み物類

この中でも①が最も重要な項目で、「デパートに包装して売っている慰問袋」より、たとえ些細なものでも真心を込めて送ってくれるものが兵士たちを慰め、戦地での数少ない楽しみの1つになっていた。しかし当時数を増やしていたデパートは慰問袋をビジネスチャンスと捉え、3～5円という高額な「松竹梅セット」や詰め合わせなどの販売に力を入れていた。デパートからそのままの形で戦地に直送される慰問袋も多かったようで、「一番目立つのは内地のデパートから

図9 献納慰問袋の会の広告



「[広告] 戦線で喜ばれる 献納慰問袋の会／東京三越」(『読売』昭和14年10月3日夕刊2面)

デパート(三越、松坂屋、高島屋、浅草松屋、伊勢丹、伊東屋など)の広告が見られた(図9)。

④の家庭的な日用品も非常に歓迎されたようで、陸軍恤兵部から官報に発表された『陸軍恤兵品取扱ひに関する改正事件』には「手拭、下帯、ハンカチーフ、葉書、石鹼、絵葉書、手帖鉛筆等の日用品……」と好ましい慰問袋の内容が明示された<sup>65)</sup>。この他にも「甘いもの」を求める声<sup>66)</sup>や、「双六や羽子板」などの玩具や人形、「鯉のぼり」など、童心にかえることのできるものを喜ぶ声も見られた<sup>67)</sup>。戦地の兵士の中には、送られてきた慰問袋の袋自体を用いて鯉のぼり<sup>68)</sup>や襦袢<sup>69)</sup>を製作した者もいた。戦地では慰問品だけでなく、文字通り慰問“袋”もうまく活用されていたのである。

一方、慰問袋に入れない方が良い品々としては、現地に届くまで時間がかかるため「腐敗し易い」<sup>70)</sup> 食料品や「壊れやすいもの」<sup>71)</sup> が挙げられている。また新聞広告に「慰問袋に内地のタバコを入れませう」と頻繁に掲載されていた「煙草」も、「タバコは湿らぬやう嚴重に包装して下さい」と注意書きが添えられていた(図10)<sup>72)</sup> ように輸送中に使えなくなってしまうことが多かつたらしく、慰問袋に入れるには「不適當」とする記述も見られた<sup>73)</sup>。

また慰問袋は内地と戦地を精神的にも繋ぐ役割を果たしており、慰問袋が結ぶ縁も多くあったという。戦地の兵士が見ず知らずの内地の女性から慰問袋を送られたことをきっかけに交流を重ね、恋愛関係に発展したという話<sup>74)</sup> も少なからずメディアに取り上げられている。また内地の子供からの心の籠った慰問袋に感

発送された慰問袋で、あのボール箱の八割迄は破れてしまって不完全包装の見本みたいで……デパートで買った品は持ち帰って荷造りをし直してほしい」という苦情が現地から届いていたという<sup>64)</sup>。慰問袋にビジネスチャンスを見出したデパートは、慰問袋専用のフロアを設けたり、慰問袋に何を入れたら戦地の兵隊さんに喜ばれるかを学ぶ陸軍省後援日本百貨店組合主催の講習会「献納慰問袋の会」を開くなど精力的に活動しており、新聞にも様々な

図10 慰問袋に入れる煙草の広告



「〔広告〕戦線に煙草を！」（『読売』昭和14年11月19日朝刊4面）

激した兵士が戦地から砂糖などの戦利品<sup>75)</sup>や戦地に咲く花を使った押花<sup>76)</sup>などを返礼品として送るなどの交流も取り上げられている。慰問袋には必需品供給という目的の他に、戦地の兵士たちの心を慰め、内地との縁も繋げる重要な役割があったのである。

しかし送られる慰問袋の数は年々少なくなっていき、海軍の慰問袋は昭和13年の50万個に比べ昭和15年には20万個と半分以上減り、陸軍の慰問袋も約189万個から36万個と約5分の1にまで減っていた<sup>77)</sup>。その理由を海軍省恤兵係海軍主計少佐茶谷東海は「事変勃発当初や……華々しい戦果のあつた頃は恤兵品の数も非常に多かつた」が、「最近の如く警備体制の状態となり、殊に新政権<sup>78)</sup>が樹立した今日、事変が大体片付いたかの如く早合点している向きが相当あるのではないかと思はれる」と分析している<sup>79)</sup>。また読売新聞ではその理由を国民が「慰問袋より現金の方でと気を利かし過ぎた結果」ではないかと推測している。当時、戦地において慰問袋などの現物支給より現金支給の方が求められていると考えていた国民が多かったことが分かる。この状況に対し陸軍省も頭を悩ませていたらしく、恤兵金の一部を使って陸軍省で慰問袋の作成をするという案も出たが、官製の慰問袋は戦地の兵士たちに喜ばれないという実態もあり、暗礁に乗り上げてしまったという<sup>80)</sup>。また慰問袋は十分に送られていたものの、現地の輸送力逼迫に伴い中々兵士たちに行き渡らないという事情もあった<sup>81)</sup>。

こうして広告も含め、慰問袋の話題は盛んにメディアに取り上げられていたが、戦局が悪化してきた昭和19年初頭に海軍省恤兵部が「深刻な情勢の下戦時輸送力確保と大事な物資を費す銃後の深い思ひやり」から「南方向けの慰問袋や慰問帳

を遠慮する」ことを発表した<sup>82)</sup> こともあってか、それ以降紙面に記述が見られなくなる。

また、慰問袋を悪用して私腹を肥やす奸商が存在していたことも明らかになっているが、それについては後述することにする。

### Ⅲ 慰問団に関する批判

既述のように戦地の最前線や過酷な労働現場に赴く慰問団は、多くの将士や傷病兵、増産戦士にとって非常に嬉しい存在であったことが、多くの記事から読み取れる。その一方で、慰問団の慰問内容や態度などに関して、慰問を受ける側の兵士たちや世論から複数の批判の声が上がっていた。本章ではこれら慰問団に関する様々な批判を追ってみたい。

#### 1 慰問団自体への批判

この節では慰問団の結成目的や慰問先での態度、派遣時期など、慰問団の存在自体に対する批判を明らかにする。

まず、慰問の目的をはき違えている慰問団がいることに対して批判が生じていた。これについては主に2つのタイプが挙げられる。1つ目は、慰問を「副産物を得るためのもの」と捉えているタイプである。次の引用文は、唐山虎吉によって『文藝春秋』に投稿された「慰問団奇聞」の中で語られた、女流画家のH<sup>83)</sup>が遭遇した慰問団の様子である。

彼等が車中で、包みを広げると、中から、蒙古王から贈られた狐の毛皮を初めとして、買ったのか、搔つ払つたのか、え体の知れぬ、さまゝゝの品物が出てきた。彼等はそれ等の品々を比べつゝ、やれ狐の尻尾が、一寸長いとか短いとか、語り合つて、捕獲物から来る快感をいつまでも噛みしめて、享樂するのであつた。……戦線に向つて歩みつゝある、慰問者の眼つきを見るがいゝ。彼等は蚤取り眼で、何か銃剣の切れつ端でも、落ちて居はしないかと、探し廻つて居るのである<sup>84)</sup>。

これは、慰問対象である兵士たちも共に乗車している列車内において、あるM党<sup>85)</sup> 代議士の慰問団が見せた、慰問団らしからぬ行動である。彼らは慰問中

に訪問した蒙古王<sup>86)</sup>から賜った贈り物や様々な高級品を広げ、浮足立った様子だったという。唐山は、「これが兵達の、慰安にならないことは、知れ切ったこと」<sup>87)</sup>と冷ややかな見方をしている。このように、慰問に対する返礼品や慰問途中に手にする珍しい品々が慰問の目的であると言わんばかりの様子は、周囲の人々や兵士たちにとって到底受け入れられるものではなかったといえよう。

第二は、慰問は「自らの政治的立場を盤石にするためのもの」と捉えているタイプである。次の引用文は上記と同様、唐山の「慰問団奇聞」からの抜粋である。

Sを団長とする、衆議院の一行だつたと思はれる。彼等は前以て、内地で慰問感想文なるものを何万部と印刷して置いて、上海に到着するや否や其足で直ちに軍事郵便に托して、各自の選挙区に、送り届ける手続きを取つたのである。……これは選挙戦術として、最も効果的なるもの、一つで……野戦郵便局が、彼等の選挙運動のために、設けられたものではないことに、気がつかないのは大きな手落ちだつた<sup>88)</sup>。

この衆議院慰問団は選挙での票稼ぎのため、兵士たちの慰問に対する感想文を内地であらかじめ捏造し、わざわざ慰問先の上海から内地に送り返そうとしたのである。この行動は、彼らが慰問を政治目的として捉えていることを意味する。もっともこの慰問団の場合、実際に戦地で命をかけて戦う兵士たちを見て心を入れ替え、上海に戻った際に送ろうとしていた感想文を回収したそうだが、このような行動をとる議員慰問団は他にも多く存在したと推測できる。

このように戦地を慰問する目的より別の目的のために大陸へ渡る集団は他にもいたようである。例えば、本門法華宗大本山妙蓮寺が送った皇軍慰問団は、皇軍慰問を終えた後「回教徒との提携」や「日持上人が満蒙各地を巡教した事跡などについても最近発見された文献についてできるだけ詳細に調査する」予定を立てていた<sup>89)</sup>。慰問した後の予定を綿密に示しているということから、この慰問団の目的は慰問よりも現地視察や宗教提携の側面が強かったといえる。

以上のように、純粹に戦地を慰問し兵士たちを癒し激励する慰問を目的としない慰問団は、戦地からも世論からも批判を受けていたようである。

次に、戦地に赴く慰問団の態度に関する批判が多く見られた。上記の唐山は、北支の兵士から彼らを慰問しに来た貴族院慰問団への不満が書かれた信書を受け取っている。この慰問団は慰問対象の兵士たちが捧銃の礼をして出迎える中、「お

殿様らしく鷹揚に、礼を返ししながら、列車と共に行き過ぎてしまつた」という。そこには、「せめて眠りだけでも、邪魔をしないでくれ。これがせめてもの、僕達への慰問だ」と兵士たちの悲痛な訴えが記されていた<sup>90)</sup>。またある慰問使一行は、「部隊長のために整列した兵隊さんを自分達の歓迎と感違ひし……横柄な（内地と同様に）態度で先づ部隊長を〇〇君！ と呼んで並居る将士を怒らせ、自動車のハンドルをとる勇士を“オイ運転手”と呼んで激怒させてしまつた」<sup>91)</sup>という。兵士たちに癒しや活力を与えるべき慰問団が、その横柄で傲慢な態度から逆に出迎える兵士たちにストレスを与えてしまっていたのである。以上のように、目的や態度に問題があった慰問団には、衆議院や貴族院から派遣される代議士慰問団が多く挙げられており、「代議士慰問団は歓迎しない」「来てほしくない」といった感想がメディアにおいてよく紹介されていた。

次に、慰問団が戦地に赴く派遣時期や派遣場所についての批判も見られた。慰問団の派遣時期はある程度は各団体に裁量権が与えられており、その時期は様々であった。しかし、戦地の兵士たちにとっては慰問団に来てほしい時期とそうでない時期があったようである。池田亨が雑誌『兵隊』に寄せた「慰問されにきた慰問団」と題する一文の中に見える次の一節は、それを示している。

遠く南支まで慰問に来て下さる赤誠には感銘するが、もつと適切な時期に、間を切らさずに、やつて来て下さいと、愚痴の一つも云ひたくなる。……わざと廣東の暑い季節は敬遠して、一つも来てくれない。内地がそろそろ寒さに向ひ、反対に廣東が涼しく良い気候になると、われもわれもと雨後の筍の如くニヨキニヨキと、涼しい顔をして現はれてくる。いつたい彼等は避寒旅行に来たのか、遊覧に来たのかと、皮肉の一つも出やうといふものだ<sup>92)</sup>。

戦地においては、雨期の長い5、6月や気温の高い7、8月の慰問を期待していたようであるが、実際にはそれ以外の気候が穏やかな時期に慰問団の来訪が集中してしまっていたという。また派遣場所に関しては、主要な都市にばかり赴き危険な前線には慰問に訪れない、という批判が見られた<sup>93)</sup>。このように内地で決められる慰問団派遣の時期や場所は、実際に戦地の兵士たちが求めていたものとは異なることがあったようである。

最後に、東京市会の慰問団が華美すぎることに批判を紹介したい。東京市会の慰問団は、世論から生じた「大名行列過ぎるとの非難」のために派遣中止と

なった<sup>94)</sup>。昭和12年9月9日に慰問団派遣が中止となってからも東京市会は派遣を諦めず、内務省ほか各関係省に慰問団派遣を打診していたが、なかなか了解を得られなかった。最初の記事から約1か月後の10月20日できえ、内務省の地方局長に「まだ東京市から皇軍慰問係を派遣するに適当な時期ではない」<sup>95)</sup>と拒否されており、結局市会議員の皇軍慰問が認められ出発できたのは、年をまたいだ昭和13年6月23日であった<sup>96)</sup>。第一回慰問団派遣が中止となった昭和12年9月は第一次近衛文磨内閣により「国民精神総動員」が叫ばれ、華美さや贅沢さが戒められ始めた時期であり、東京市会の慰問団はこの時流にそぐわなかったのであろう。

以上のように、慰問団の活躍が華々しく報じられる一方で、その目的や体制、派遣場所や派遣時期など慰問団自体に対する批判的意見も多く見られた。

## 2 慰問団の提供する演芸、娯楽への不満

前節では慰問団自体に対する批判的意見を取り上げたが、本節では慰問団が戦地で提供する演芸、娯楽の内容に対して発された不満を明らかにする。

まずは、慰問団の提供する演芸や娯楽は、戦地の全ての兵士たちが共通して満足できるわけではないという現実である。読売新聞に掲載されたプロ棋士安永一の連載記事の一節は、次のように書いていた。

部屋を訪れた瞬間、寝てみた傷兵さん達は一斉に何事だらうか？ と体を起し、其れが碁将棋の慰問と解ると「俺達は解らないから用が無い」と云ふ風につまらなさうに横になつて了つた。碁、将棋を知らない斯うした人が此の部屋だけでも可成りゐる。……一方は面白さうに……一方はつまらなさうに……併し大成会の方針がいや我々の方針が、既に碁将棋を知つてゐるものだけを慰問すれば良いと云ふなら、不用意を通り越して間違つてゐる<sup>97)</sup>。

この記事が掲載された当時、戦線に提供するにはどんな娯楽がふさわしいか、という論議が新聞紙上でも活発になっていたという<sup>98)</sup>。当時の娯楽には、歌、踊り、漫才や講談、演劇、囲碁・将棋、相撲、歌舞伎、似顔絵、雑誌などの出版物や、あまり取り上げられないものでいえば釣りや写真など、様々なものがあつた。しかし上記の例でいえば、“囲碁・将棋”は「囲碁のような智能的な娯楽が、精神を鎮静するに役立つのは当然」<sup>99)</sup>として、戦地の兵隊とプロ棋士たちが対戦してとても盛況だったという記事が多い一方で、ルールを知らない兵隊たちが参加

できないという欠点が挙げられた。また慰問として最もポピュラーだった“歌(唄、レコード)”には、「さなきだに感傷に陥りやすい戦傷の身に、レコードを聴くなぞ慰安と云ふよりはかへつて身につまされて思はず涙をさそはれたりしてイヤな気がする」と云ふ人が多かつた<sup>100)</sup> というように、最前線で命をかけて戦っている兵隊にとって歌が逆に郷愁や悲哀を誘ってしまうという意見もあった。またわらわし隊が有名である“漫才や講談”には、「『わらわし隊』が来ても、病舎に呻吟して精神が内攻的になつてゐるこれ等の人々に取つては、それが面白ければ面白い程幻滅を感じる意味もあり、餘り好ましくない<sup>101)</sup>」という意見が出ていた。また、ドイツの科学慰問隊と日本の演芸慰問隊を比較し、「日本人にだつて、既に『まんざい』に満足しない層はあるだろう。……慰問袋に入れてやる本だつて、娯楽雑誌や講談本などだけでなしに、袖珍科学書であつてよい時代ではあるまいか<sup>102)</sup>」と慰問内容を他国のようにもっと科学的にすべきだという意見も見られた。癒され、励まされる娯楽は人それぞれであり、またその人が置かれている環境や場所によっても大きく変わり得るものである。戦地の兵士たち全員に適した娯楽を提供するのは、慰問団にとって非常に困難なことである以上、このような不満が出ることは必定であつたといえよう。

次に、慰問団の提供する慰問・娯楽を享受できない環境におかれている人々の不満が挙げられる。昭和13年頃から戦争の長期化が危ぶまれ、内地では「生産戦士」「増産戦士」「鶴嘴戦士」の文字が新聞紙上に多く登場するようになっていくが、鉱山や炭坑、工場といった過酷な労働環境の下、日々増産に挺身していた彼らにとって慰問隊は大きな力になっていたようで、特に移動慰問隊の提供する映画は最も喜ばれ、「産業戦士の血となり肉となり直ちに仕事に表れる増産への映画」を求める工場の声が大きかつたという。しかしその一方、①前売り券が買えない ②映画館が満員で座れない ③映画館や劇場の多くが都市部にあるために映画館までの満員電車が辛いという不満が挙がっており、運営上の工夫が求められていた<sup>103)</sup>。

以上のように、慰問団が力を入れて活動を行っていてもそれを受容する人々や環境に適合しないことがあり、それらが慰問に対する不満に繋がっていたといえる。

#### Ⅳ 慰問を騙る犯罪の横行

慰問団の活動が活発になっていた当時、それに比例して慰問を悪用した様々な犯罪行為が横行していたようである。例えば新聞は、「挙国一致的熱意を逆用して金儲けに暗躍する不徳漢が全国的に跋扈し出し、各地から頻々被害報告があるので内務省警保局ではけさ全国府県知事宛に嚴重取り締まりを通牒した」と報じている<sup>104)</sup>。慰問団に所属できることを餌に慰問金をだまし取る手法の詐欺や、慰問団に使うべき慰問費を自分の懐に入れる横領が全国各地で横行していたことが分かる。銃後と戦地を結ぶ慰問団を利用した悪事の発生は、挙国一致体制にも大きく水をさす事態であった。本章では、“慰問”を盾にして発生した犯罪について明らかにする。

まずは、慰問を利用した詐欺事件の存在を挙げる。読売新聞の「銃後に躍る時局詐欺」という連載に、未亡人を「皇軍慰問団の一人にならないか」と誘い、了承した後に旅費、慰問品購入費、準備金などを名目に何度も金を要求、計800円を慰問費としてだまし取った詐欺師の話が紹介されている<sup>105)</sup>。このような詐欺は多く発生していたようで、某レコード会社所属の歌手を皇軍慰問団に推薦してやると現金20円と商品券10円、腕時計をだまし取った男が逮捕されたり<sup>106)</sup>、現金生活に困った女性が街頭で慰問金と称して金銭を搾取しようとしたりする事件<sup>107)</sup>が取り上げられている。

また前章でも取り上げた慰問袋を悪用した詐欺事件も起きていた。慰問袋は戦局が悪化すると数は減少し続けるものの、内地の日本国民と戦地の兵士たちを繋ぐ重要な架け橋となっていた。その影響力の強さから、当時数を増やしていた大手デパートのビジネス戦略にも利用されていた。しかし、慰問袋を悪用して私腹を肥やす「奸商」と呼ばれる悪徳業者が存在していたことが明らかになっている。満州事変直後の時期、数が急激に増えた慰問袋に偽装して某薬品<sup>108)</sup>を関東軍に送り、誇大広告を打ったり軍事郵便を利用して戦地の兵士たちから商品の感想レビューを集めたりするなどの悪徳行為を行う会社が陸軍省に警戒されていた<sup>109)</sup>。また太平洋戦争で日本が劣勢に陥り始めていた昭和18年には、戦地に送られる「皇軍慰問品」として大量に製造されていたふりかけが実は名ばかりの粗悪品であったことが判明し、数十万円の利益を得ていた複数の悪徳業者が警視庁に摘発される事件が起こっていた<sup>110)</sup>。

また詐欺の他に、国民から集められた慰問金を私的に横領する者も現れた<sup>111)</sup>。日中満協会という団体の常務理事であった大村安一<sup>112)</sup>が、各方面から慰問団派遣のための寄付金2万円のうち8千円を横領して協会を辞任する事件が起こっている。協会を立ち上げ、慰問団の資金に使われるべき費用を横領していたのである。

以上のように、慰問は様々な詐欺師や悪徳業者に悪用されており、その都度陸軍省や警察組織に警戒されていた。これは“慰問”が社会において非常に大きな影響力を持っていたことを逆に裏付けているといえよう。

## おわりに

本論文では、各種メディアを通じて満州事変発生から終戦まで約14年間の慰問の様子や慰問団の実状について分析した。

第I章では、当時活躍していた慰問団がその活動内容や派遣先によって大別すると4つに分類できることを紹介した上で、新聞の計量分析を基に、戦争に伴う日本の対外的状況の変化が慰問団の種類や派遣数、メディア報道に大きく影響を及ぼしていたことを明らかにした。また慰問団が直面した厳しく統制された慰問現場や危険な戦地の実態を紹介した。

第II章では当時の慰問の実態について慰問文と慰問袋を中心に分析し、慰問が内地と戦地の縁を繋げ兵士たちの心の拠り所になっていた一方で、国民の戦況不理解や戦地の輸送力低下、戦局悪化に伴い、戦地に十分な慰問が供給できていなかったことを明らかにした。

第III章では新聞、雑誌に掲載された慰問や慰問団に対する意見、感想を分析することで、慰問が必ずしも全ての人々に受け入れられていたわけではなく、数多くの批判的意見があったことが判明した。政府によって言論統制がなされ、新聞や雑誌等の検閲が行われていた中、政府の推し進める慰問に対する批判的意見が掲載されていたことは注目されて良いであろう。

第IV章では、内地で頻発した慰問を悪用した詐欺や横領事件を取り上げ、内地における慰問の影響力を示した上で、それらを抑え込もうとする軍・警察・政府の動きを明らかにした。その背景には、慰問を推し進めることで挙国一致体制をより強固なものにしようと考えていた政府の警戒心が垣間見られた。

以上のような問題や批判を生んだ慰問団であったが、慰問行為が、戦地で懸命

に戦う兵士たちの心を癒し、内地との繋がりを感じさせ団結を促す役割や、内地で急激に加速していく増産運動や挙国一致体制をより強固にする役割を果たしていたことは事実であった。戦時下という社会のうねりの中で、慰問団の慰問は国外から国内に重点がシフトしながらも、絶えず日本国民を支え続けたのである。

- 1) 陸海恤兵部は、『読売』の紙面上で「出征の兵士に送るお金や、品物を扱ふところ」と説明している（『戦地の兵士へ贈る慰問袋の始まり それはいつ頃か?』（『読売』昭和12年10月24日朝刊5面））。
- 2) 押田信子『兵士のアイドル 幻の慰問雑誌に見るもうひとつの戦争』（旬報社、平成28年、266頁）。
- 3) 「可憐な慰問文 大袋に一杯 お守りや勝餅まで携えて少年団代表満州へ」（『読売』昭和6年11月17日朝刊7面）。
- 4) 「愛婦の一行帰る 皇軍慰問の旅路から」（『東朝』昭和12年4月28日夕刊3面）。
- 5) 「在満部隊慰問団 豊島郷軍の代表」（『読売』昭和11年9月3日夕刊4面）。
- 6) 「本郷慰問団帰る」（『東朝』昭和11年11月12日朝刊10面）。
- 7) 「衆院皇軍慰問」（『読売』昭和12年8月9日朝刊2面）。
- 8) 唐山虎吉「慰問団奇聞」（『文藝春秋』昭和13年2月号312-319頁）。
- 9) 「府会は慰問使中止」（『読売』昭和12年9月9日第2夕刊2面）、「諦め切れぬ大名慰問団 市会の申合せ」（『読売』昭和12年10月20日第2夕刊2面）、「市議けふ慰問行へ」（『読売』昭和13年6月24日第2夕刊2面）。
- 10) 「優しい慰めに感謝されて 愛国婦人会の代表、派遣軍慰問から昨日帰京」（『読売』昭和6年11月24日朝刊7面）。
- 11) 「少年が見た「戦争」 可愛い慰問使土産話 僕たちまで狙撃した卑怯な敗残兵め」（『読売』昭和13年11月11日朝刊7面）。
- 12) 「豆慰問隊帰る」（『朝日』昭和13年11月10日夕刊2面）、「戦線写真ニュース／「豆慰問隊」帰京」（『朝日』昭和13年11月11日朝刊11面）。
- 13) 「女子青年団の慰問使出発」（『読売』昭和6年11月11日朝刊7面）、「女子青年団の慰問使出発／神戸」（『読売』昭和6年11月12日朝刊7面）。
- 14) 「[よみうり少年新聞] 満州に転戦する日本軍将士を慰問して 本紙に寄せられた感想」（『読売』昭和6年11月22日第2別冊2面）。
- 15) 「学生慰問自動車隊 夏休みを利用し慶大生最前線へ けふ最後の猛練習」（『読売』昭和13年7月14日夕刊2面）、「明大慰問団帰途へ」（『読売』昭和13年8月19日朝刊11面）。
- 16) 昭和11年に思想犯保護観察法が施行され、司法省によって治安維持法などに抵触する思想を持つ者に保護観察者を付ける事業が行われていた。これにより、当時思想犯とされていた共産主義者や社会主義者らが転向後も監視下に置かれていたのである。
- 17) 「旧友曾木君戦死の地を吊って 転向派の一行帰京」（『読売』昭和12年11月19日

- 朝刊7面)。
- 18) 早坂隆『戦時演芸慰問団「わらわし隊」の記録 芸人たちが見た日中戦争』(中央公論新社、平成20年、19-20頁)。
  - 19) 「わらわし隊漢口へ」(『東朝』昭和13年12月7日朝刊11面)他。
  - 20) 「ターキー出陣 SSK 幹部前線へ慰問行」(『読売』昭和13年10月16日第2夕刊2面)。
  - 21) 押田信子「兵士のアイドル 幻の慰問雑誌に見るもうひとつの戦争」(旬報社、平成28年、29-30頁)。
  - 22) 「[第12回対抗選手権棋戦] = 1 (連載)」(『読売』昭和14年3月18日夕刊2面)。
  - 23) 「「輝く部隊」南支慰問/日中戦争」(『読売』昭和15年12月20日朝刊3面)。
  - 24) 相撲慰問団に関しては片岡壮太の『戦時体制下の相撲～雑誌『相撲』を通じて～』という先行研究が存在し、そこでは相撲慰問団の派遣目的が慰問の他に慈善事業としての「勸進相撲」や「心身の発展のための相撲精神や相撲の実践の奨励」のため、また「満州・朝鮮で日本文化の浸透を図る」ためであったことが詳細に記されている。
  - 25) 「慰問行の玉錦ら帰る/東京駅」(『読売』昭和13年5月5日朝刊7面)。
  - 26) 「[戦線通信] 1万5000円の舞台/中支保田部隊・渡辺正一少佐」(『東朝』昭和16年4月7日朝刊3面)。
  - 27) 「優しい慰問団2組/第3陸軍病院」(『読売』昭和14年2月20日朝刊7面)。
  - 28) 「家庭/農繁期スケッチ/お姉さんの紙芝居 『小猿三ちゃん』に湧く歓声 銚子高女の慰問隊」(『東朝』昭和14年6月8日朝刊6面)。
  - 29) 「異郷で身に沁む母の愛 少年工感謝集 増産でご報恩 勤労奉仕日婦会員へ感謝文」(『読売』昭和17年12月22日朝刊3面)。
  - 30) 「職場へ『一日母さん』」(『読売』昭和18年12月19日朝刊3面)。
  - 31) 前掲注29)。
  - 32) 「銃後の活躍35年 愛国婦人会が記念の大祝典」(『東朝』昭和11年2月23日夕刊2面)。
  - 33) 「可愛い慰問隊 陸軍病院で700名の大遊戯/東京・牛込」(『読売』昭和12年11月16日第2夕刊2面)。
  - 34) 「「光なき11勇士へ」可憐、声の慰問団 陸軍病院に麗しい風景」(『読売』昭和12年12月8日朝刊7面)。
  - 35) 「鍼灸慰問隊練成終わる」(『読売』昭和18年5月8日朝刊3面)。
  - 36) 「「輸血慰問隊」上京」(『東朝』昭和16年4月29日朝刊7面)。
  - 37) 「海上封鎖座談会(9)/コレラ封鎖も亦完璧 まだ一歩も内地に入らず 手術難克服の病院船」(『東朝』昭和14年8月14日朝刊11面)。
  - 38) 「慰問団」に関係する朝日新聞と読売新聞の記事数は、表1の通りであった。ただし、同じ慰問団であっても慰問団の派遣決定や現地到着、日本帰国などの記事はそれぞれ別の記事としてカウントしている。
  - 39) 松原操(ミス・コロムビア)「皇軍慰問団誌上放送 待っている兵隊さん/懐中

電燈の一斉射撃」（『青年』昭和13年6月1日6月号、174-175頁）。

- 40) 「家庭／戦塵をあびて 慰問婦人の座談会 私達は何を感じたか？（1）／慰めたい一心、トラックを交代で運転」（『東朝』昭和13年1月19日朝刊6面）。
  - 41) 「家庭／戦塵をあびて 慰問婦人の座談会 私達は何を感じたか？（6）／女・子供は大切 小学生の作文に泣いて感激」（『東朝』昭和13年1月25日朝刊6面）。
  - 42) 「本社の特派皇軍慰問隊（下）／「笑い」の大將、出陣の言葉 エンタツ君一行の上海行」（『東朝』昭和13年1月16日朝刊6面）。
  - 43) 馬場マコト『従軍歌謡慰問団』（白水社、平成24年、120頁）。
  - 44) 翼賛会支部「増産慰安の映画会」（『郷土部隊慰問 銃後千葉』昭和18年35頁）（←一ノ瀬俊也『編集復刻版 昭和期「銃後」関係資料集成』第9巻、六花出版、平成25年、400頁）中に記載）。
  - 45) 「決戦時報／工場娯楽は袴ぬいで 名指しを待つ芸能人」（『東朝』昭和19年5月19日朝刊3面）。
  - 46) 池澤茂「慰問団」（『コギト』昭和17年3月116号、14-18頁）。
  - 47) 「呪いの雨4日の上海最前線へ将兵慰問 子供の如く喜ぶ勇士」（『読売』昭和12年9月20日夕刊2面）。
  - 48) 「女浪曲師戦傷」（『読売』昭和14年4月28日朝刊7面）。
  - 49) 「[ラジオ版] 東京 AK 皇軍慰問爆笑報告 ほか」（『読売』昭和13年3月9日朝刊10面）。
  - 50) 「皇軍慰問団襲撃さる 12将兵戦死」（『東朝』昭和16年7月25日朝刊2面）。
  - 51) 柏木新『はなし家たちの戦争 禁演落語と国策落語』（本の泉社、平成22年、168-169頁）。
- 小島貞二『こんな落語家があった』（うなぎ書房、平成15年、128-130頁）。
- 52) 馬場マコト『従軍歌謡慰問団』（白水社、平成24年、165頁）。
  - 53) 前掲注42)。
  - 54) 「都市のみで帰る憾み 演芸隊待つ前線 保護院、慰問方法を統一」（『東朝』昭和15年6月14日朝刊7面）。
  - 55) 「学生慰問隊、帰京」（『東朝』昭和13年1月23日朝刊10面）。
  - 56) 前掲注54)。
  - 57) 「東京版／郷土部隊 戦線から・銃後から（14）／戦線で“選挙運動” 排撃される慰問文と慰問使／河合特派員」（『東朝』昭和14年9月28日朝刊10面）。
  - 58) 一ノ瀬俊也『近代日本軍隊教育・生活マニュアル資料集成一昭和編一第六巻〈前線への慰問文・式辞挨拶のために①〉』（柏書房、平成22年）。
  - 59) 一ノ瀬俊也『近代日本軍隊教育・生活マニュアル資料集成一昭和編一第七巻〈前線への慰問文・式辞挨拶のために②〉』（柏書房、平成22年）。
  - 60) 「戦地の兵士へ贈る慰問袋の始まり それはいつ頃か？」（『読売』昭和12年10月24日朝刊5面）。
  - 61) 「令孫の熱意に動かされて 石黒子爵家からも」（『読売』昭和6年11月21日朝刊7面）。

- 62) 前掲注54)。
- 63) 陸軍恤兵部「慰問袋の注意」(『昭和模範慰問文』付録、昭和15年、256-262頁)(←(一ノ瀬俊也『近代日本軍隊教育・生活マニュアル資料集成—昭和編—第六卷〈前線への慰問文・式辞挨拶のために①〉』(柏書房、平成22年、765-768頁))中に記載)。
- 64) 井上寿一『日中戦争下の日本』(講談社、平成19年、33-34頁)。
- 65) 「日用品入りの慰問袋歓迎」(『読売』昭和13年9月22日朝刊7面)。
- 66) 「布哇部隊の勇士から皆さんへ希望お願い」(『読売』昭和13年11月20日朝刊5面)。
- 67) 「葦平軍曹が語る“夫人と兵隊” 慰問袋には玩具を 喜ばれる双六や羽子板！」(『読売』昭和14年11月17日朝刊5面)。
- 68) 「慰問袋で即製鯉のぼり 郷土の三ツ子を祝うゆかしい前線だより／中支戦線」(『読売』昭和16年4月16日朝刊7面)。
- 69) 「[大陸戦陣生活展から] 慰問袋で日の丸じゅばん 兵の工夫を生かせ銃後に」(『読売』昭和17年7月3日朝刊4面)。
- 70) 「慰問袋を漢口へ お正月に間に合います」(『読売』昭和13年10月27日朝刊5面)。
- 71) 「[銃後奉公強化運動] = 下 壊れ物を避けて 慰問袋へ海軍のお願い」(『読売』昭和16年10月4日朝刊4面)。
- 72) 「[広告] 慰問袋にタバコ」(『読売』昭和14年11月17日朝刊4面) など他多数。
- 73) 「慰問袋 工夫して作ること 銃後の有様を手紙で」(『読売』昭和18年2月5日朝刊4面)。
- 74) 「慰問袋が取持つ恋 嬉し実を結ぶ 北満警備の巡査とお手伝いさん」(『読売』昭和8年6月11日朝刊7面)。
- 75) 「お砂糖 勇士からヨイコへ返礼」(『読売』昭和19年3月8日朝刊3面)。
- 76) 「優等の御褒美に戦線から“七ツの押花”の贈物 慰問袋が結ぶ花信／日中戦争」(『読売』昭和13年5月10日夕刊2面)。
- 77) 押田信子「日本陸軍・海軍の慰問雑誌『陣中俱樂部』『戦線文庫』研究序説」(『軍事史学』平成29年6月、Vol. 53 (1)、pp. 48-67)。
- 78) 「新政権」とは、「汪兆銘」政権のことであると推測される。
- 79) 前掲注77)。
- 80) 「上海戦線に漂う一抹の寂しさ 慰問袋の飢饉」(『読売』昭和7年4月12日朝刊7面)。
- 81) 「戦地へ正月用慰問袋 既製品よりも真心の手製で」(『読売』昭和14年12月6日朝刊7面)。
- 82) 「海軍で慰問袋をご辞退 決勝輸送の完璧願う前線戦士」(『読売』昭和19年1月25日朝刊3面)。
- 83) 「H」とは、女流画家の「長谷川春子」のことであると推測される。
- 84) 唐山虎吉「慰問団奇聞」(『文藝春秋』昭和13年2月号、313-316頁)。
- 85) おそらくM党とは「民政党」のことであると推測される。
- 86) 「蒙古王」とは、蒙古自治政府主席であった「徳王」のことであると推測される。

- 87) 唐山虎吉「慰問団奇聞」(『文藝春秋』昭和13年2月号、314頁)。
- 88) 唐山虎吉「慰問団奇聞」(『文藝春秋』昭和13年2月号、314-315頁)。
- 89) 「回教との提携図る／本門法華妙蓮寺の皇軍慰問団 入蒙の計画進む」(『中外日報』昭和13年8月12日3面)。
- 90) 唐山虎吉「慰問団奇聞」(『文藝春秋』昭和13年2月号、312-313頁)。
- 91) 前掲注57)。
- 92) 池田亨「慰問されに來た慰問団」(『兵隊』昭和15年1月1日11号、26-27頁)。
- 93) 前掲注54)。
- 94) 「府会は慰問使中止」(『読売』昭和12年9月9日第2夕刊2面)。
- 95) 「諦め切れぬ大名慰問団 市会の申合せ」(『読売』昭和12年10月20日第2夕刊2面)。
- 96) 「市議きょう慰問行へ」(『読売』昭和13年6月24日第2夕刊2面)。
- 97) 安永一「[第12回対抗選手権棋戦] = 1 (連載)」(『読売』昭和14年3月18日夕刊2面)。
- 98) 「[前線と娯楽] = 上 囲碁慰問より還りて／安永一」(『読売』昭和14年4月16日夕刊2面)。
- 99) 「[囲碁慰問より還りて] 前線と娯楽 = 下／安永一」(『読売』昭和14年4月19日夕刊2面)。
- 100) 同上。
- 101) 同上。
- 102) 「科学するドイツ 前線へも指導陣／東大教授、航研所員、工学博士・冨塚清」(『読売』昭和16年1月29日夕刊3面)。
- 103) 「生活に増産あり(6)／娯楽 疲れ洗う慰問団 “お座りなり”は逆効果 もっとほしい科学映画」(『東朝』昭和19年1月27日朝刊3面)。
- 104) 「朦朧の慰問団体 各地に横行す けさ各府県へ取り締まり通達」(『読売』昭和6年12月3日夕刊2面)。
- 105) 「[銃後に躍る時局詐欺] = 8完 中老紳士の赤い舌に慰問費800円 (連載)」(『読売』昭和13年8月27日朝刊5面)。
- 106) 「歌手まんまと一杯 皇軍慰問に名をかりて詐欺 時局を食う男捕る／東京」(『読売』昭和13年4月19日朝刊7面)。
- 107) 「大胆な21娘 『慰問金募集集』 生活に困り浅草で／東京」(『読売』昭和7年2月6日夕刊2面)。
- 108) 薬品名は不明。
- 109) 「抜け目ない奸商 慰問袋と広告! 陸軍省、ダイフンガイ!」(『読売』昭和6年12月15日夕刊2面)。
- 110) 「前線も憤慨 不正食料品『ふりかけ』」(『読売』昭和18年1月20日夕刊2面)。
- 111) 横領事件が新聞に取り上げられていた件数はたったの1件であった。横領は詐欺と違って発覚が難しいことが取り上げられる件数が少ない原因であると考えられ、実際はもっと多くの被害があったことが推測される。

- 112) 大村は詐欺・恐喝・横領の罪で5年間刑務所に服役し、その出所後にこの犯行に及んだ、前科5犯者であった。